大阪教育大学連合教職大学院の今を伝える

# 教職大学院通信

日々の実践に、理論に裏打ちされた確かな自信を加える場所

勤務と修学を両立できる環境がここにある

トピックス

- 教職大学院の改組
- 平成 30 年度実践研究フォーラム
- 教育委員会との連携・協働
- 教職大学院のプロジェクト
- 平成 29 年度修了生の実践課題研究報告書題目一覧
- 修了生・在学生の「振り返り」と「今」

# 教職大学院の改組

## さらに一歩、次のステージへ

大阪教育大学では、大学院段階での教員養成機能を教育学研究科から連合教職実践研究科（教職大学院）に移行し、拡充するための改組を平成 31 年 4 月に行います。

改組に伴い連合教職実践研究科は、専攻内のコース区分を見直し、新たに 1 専攻 4 コースで構成される大学院へと発展します。また、教育学研究科は、従来の 18 専攻体制から「国際文化専攻」「総合基礎科学専攻」「芸術文化専攻」「健康科学専攻（夜間）」の 4 専攻体制に変わります。

| コース | 対象<br>主な修学キャンパス | 養成する人材像 | 入学定員の目安 |
|---|---|---|---|
| スクールリーダーシップコース | 現職教員等<br>天王寺キャンパス<br>（昼夜間開講（※）） | 教員集団をリードし、保護者、地域住民等と協働して、学校及び地域の新しい教育課題を解決するために求められるすぐれたリーダーシップを発揮できる教員 | 30 人 |
| 援助ニーズ教育実践コース | 現職教員等及び学部卒学生等<br>天王寺キャンパス<br>（昼夜間開講（※）） | 多様な援助ニーズに対応するための高度な教育的手法を探究し、「チーム学校」の考えに基づく学校内・外の関係者と協働して展開できる教員 | 30 人 |
| 教育実践力コース | 現職教員等及び学部卒学生等<br>柏原キャンパス<br>（昼間開講） | 児童生徒に即した、実践的で高度な学習指導・学習評価の能力を持ち、教員としてのカリキュラム・マネジメントや、今日的な教育課題に対応した授業開発に、先端的かつ継続的に取り組むことのできる教員 | 80 人 |
| 特別支援教育コース | | 特別支援教育の対象となる子ども一人ひとりのニーズに対応した適切な教育支援を行える高度な能力を身につけ、また特別支援教育コーディネーターとしての役割を担うことのできる教員 | 10 人 |

※注）基本的な授業開講は、夜間（1 時間目 18:00 ～、2 時間目 19:40 ～）ですが、土曜日開講授業、夏期集中講義等一部の授業については昼間に設定される場合があります。学校実習科目については、昼間に実施されます。また、現職教員等の場合は、勤めながら（原籍校等）の学校実習も可能としています。

# 平成 30 年度実践研究フォーラム

## 第 1 期生・第 2 期生の修了生がホームカミング

「実践研究フォーラム」は、教職大学院修了生と在学生との親睦を深めるとともに、修了生が実践的な研究成果を発表、交流する機会を設け、教職大学院修了後の研究活動を支援するために平成 29 年度より実施しています。

今年度より新たに実施した「ゼミ別交流会」では、ゼミごとに指導教員・修了生・在学生が交流する場となりました。

全体会では、「カリキュラムマネジメント～学校づくりの視点から～」をテーマに、田村知子教授が講演しました。教育課程とカリキュラムの違いはどこにあるのか、また、カリキュラムマネジメントの研究の位置付けや歴史等について話がありました。そして、学校が組織として効果的・効率的に教育活動を展開するためには、誰が、どのような役割を果たすべきだろうかという問題提起がありました。その中で教員に対しては「カリキュラムの使い手であるのか、作り手であるのかのどちらですか」という問題提起をされました。

その後、グループに分かれ、修了生が報告者となり、在学時に取り組んだ「実践課題研究」を土台として、修了後の実践的研究を加えて報告するラウンドテーブルを実施しました。より学校現場の実態に沿った形で研究を続けている方もいれば、新たな課題に院時代に学んだ研究方法を活かしたいなど理論と実践の融合に取り組んでおられる方もいました。

最後に全体会でラウンドテーブルの振り返りを行い、各グループの在学生からの発表、報告を共有しました。

多くの修了生・在学生の交流や、修了後の学びのコミュニティが形成されるよう支援していきます。

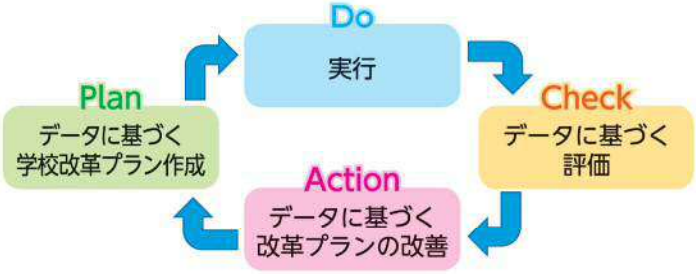
# 教育委員会との連携・協働

## 大阪の教育力の結集

教職大学院では、大阪市・堺市・高槻市・松原市等との特別連携協力校実施事業等をはじめとして、関係教育委員会との連携事業にも力を入れています。中でも、平成 29 年度には「学校教育ＩＣＴ推進リーダー養成プログラム開発事業」、平成 30 年度には「エビデンスベースの学校改革を推進可能な教員を養成するための研修プログラム開発事業」（ともに独立行政法人教職員支援機構受託事業）を実施する等実績を積み上げています。

### エビデンスベースの学校改革を推進可能な教員を養成するための研修プログラム開発事業

※開発した研修プログラムは、平成 30 年度の実践・評価を踏まえた上で改良し、改組後教職大学院における平成 31 年度の科目化を予定しています。




・データに基づく PDCA サイクルを着実に回すことができるようになる。
・客観的なデータに基づき、成果が目に見える形で課題解決を実現できる。
・さまざまな学校課題に活かすことのできる力がつく。

事業を牽引する
**庭山 和貴** 特任准教授

大阪市教育委員会との連携により、学校現場が抱える様々な課題に対応可能な学校組織の構築を支援する研修プログラムを開発・実施しています。

本研修プログラムでは、まずエビデンスとは何か？について学んだ後、エビデンスはなぜ教育にとって必要か？について、教育の目的に照らし合わせながら考えます。その後、（1）勤務校の実態把握のためのデータ収集・分析方法、（2）最新・最善のエビデンスおよび勤務校の実態に基づいた学校改革プラン作成、（3）教職員間の合意形成を促すコミュニケーション方法、（4）改革プランの進捗状況や、児童生徒が本当に伸びているのかを可視化するためのデータ収集・分析方法、（5）データに基づく改革プランの改善方法、などについて、各学校現場の実態を十分に踏まえたうえで、グループワークを交えて実践的に学べる研修内容となっています。

これによって各学校が学校改革を進めやすいように支援し、児童生徒のより一層の成長に繋げていくことを目的としています。

### 大阪市教員養成協働研究講座の設置

大阪教育大学は、大阪市と「子どもの未来を拓く大阪市と大阪教育大学の包括連携協定」を平成 30 年 2 月 21 日に締結しました。協定に基づく事業の一つとして、大阪市教育委員会と協力し、平成 30 年度から連合教職大学院内に「大阪市教員養成協働研究講座」を設置しています。同講座では元校長など学校現場経験者と大学教員が、管理職・現職教員対象の研修プログラムの開発や、大阪市の抱える教育課題への対応に取り組みます。

包括協定締結時の様子

「大阪市教員養成協働研究講座」では、管理職・現職教員対象の研修プログラムの開発を行い、大阪市教育センターでの研修で、実際に取り組んでいます。また、大阪市の抱える教育課題に対応するため、教員・院生がともに小・中学校等へ伺い、院生の実習を通して課題解決策を共に考え、実践研究を進めています。

このほか、今年度は、院生や学部学生の希望者を募り、学校での実践を直接見学する School Watching を企画・開催し、福島区の小学校で小学校英語教育の実際を参観、校長講話をいただきました。また、秋にはプログラミング教育の実践にも出かける予定です。

大阪市教員養成協働研究講座
**岡田 和子** 特任教授

本講座では、このような企画も取り入れながら、学部卒院生に対しては、近い将来教員になる者として、現場での授業を見て、参加して、子どもとふれあい、管理職から大阪市の教員の魅力・やりがい、それまでの備えについて学び取る等、これら現場交流機会も大切にしながら即戦力となる教員に育てています。また、現職教員院生に対しては、即戦力となる若い先生や次期管理職として今備えるべきことを熱心に研究し、知識を備え、学校現場に活かせるよう指導に力を入れています。

# 教職大学院のプロジェクト

## 教職大学院ならではの学びプロジェクト

教職大学院では、毎年さまざまなプロジェクトを進めています。例えば、平成 28 年度には、学力向上実践の好事例収集・活用プロジェクト、平成 29 年度には新時代の教育のための国際協働プログラム（文科省採択事業）等が展開されました。現職院生の多くがこれら教職大学院ならではのプロジェクトに参画し、新たな知見を獲得・教育現場に還元しています。

### 学力向上実践の好事例収集・活用プロジェクト

大阪府の小中学校の子どもたちの学力は、他の都道府県に比べると、依然として課題を抱えています。子どもたちの学力を高めるための営みに、マニュアルはありません。教員が指導のレパートリーを増やし、それを状況に応じて利用することが望まれます。このプロジェクトでは、現職教員である教育実践コーディネートコースの大学院生が、全国学力・学習状況調査で好成績を残している、学力向上実践に長けた学校を訪問し、その工夫点を抽出・整理します。また、所属校にそれらを導入する構想を練ります。プロジェクト参加者は、全国各地の学力向上の取り組みを目にして、学力向上実践のイメージを膨らませていました。

学校現場訪問時の様子

**胡 精吾 さん（平成 30 年 3 月修了・大阪府教育庁勤務）**

教員として大阪府外の学校で授業や取組を参観することは、自身の実践研究において大きな学びとなります。しかし今回、このプロジェクトに参加した一番の理由は、このプロジェクトが大学院の授業「校内研修のマネジメント」で学んだ理論を生かす機会になると考えたからです。このプロジェクトを通して、どのような取組が子どもたちの学力向上に効果があるのかを探り、大阪でも活用できる取組を見つけることができました。例えば、和歌山県の小学校では学力向上プランを作成し、その取組の一つに「授業の工夫としてのノート指導」がありました。これは 1 年生から 6 年生までの指導の一貫性を高める取組としても効果を上げています。このプロジェクトに参加して、自身の実践課題研究のテーマでもある幼小接続において、「学びをつなぐ」という中に「指導の一貫性」という新たな視点を広げることができました。

### 新時代の教育のための国際協働プログラム

教職大学院では、特別なニーズのある子どもへの教育をはじめとする「社会的包摂」にかかわる諸課題、そして学校安全にかかわる課題に関する学校実践のより一層の充実を目指し、G7 のメンバーであるドイツ、カナダ、イギリスの経験に学ぶため、教職大学院在学中の現職教員の実践的視座から調査を実施しました。得られた成果は、大阪の現状を前提とした具体的な提言書としてまとめ、発表しました。

※文部科学省の委託事業「平成 29 年度　新時代の教育のための国際協働プログラム」。同プログラムは、2016 年の主要 7 カ国首脳会議（G7）で採択された「倉敷宣言」に基づき、教育分野における G7 加盟国間の関係強化を図り、多様化する教育課題に対する教育実践の改善に資することを目的としています。

プログラム成果発表会の様子

**近藤 利之** さん
（現職院生・大阪府教育センター勤務）

私は、今回のプログラムでドイツに行きました。訪問した学校では、子どもたちの約半数が移民の背景を持っており、ドイツ語の習得に力を入れていました。授業参観後に行ったドイツの学校の先生と教職大学院のメンバーでの意見交流により、さらに学びを深めることができました。このような経験は教職大学院に行っていなければ、きっとできなかったと思います。外国で行われている教育に直接触れ、改めて、子どもたちの未来と教育がつながっていることを再確認することができました。

ドイツの学校現場訪問時の様子

# 平成 29 年度修了生の実践課題研究報告書題目一覧

| | 題　目 |
|---|---|
| 1 | 学校全体で取り組む生徒指導体制の実践的研究　―附属小学校を事例校として― |
| 2 | 学年で協働するための組織経営の在り方　―学年団の成長過程についてのエスノグラフィ的研究― |
| 3 | 学校組織開発における首席（主幹教諭）の役割　―企画展開型プロジェクトチームによる学校改善の取組みを通じて― |
| 4 | ミドルマネジメントによる学校の活性化　―グローバル化に向けた協働的な教育活動の改善を通して― |
| 5 | 若手教員が主体的に授業デザインを開発していく研究会 |
| 6 | 子どもの主体性を引き出す教師の関わりと授業の検討　―体験活動に着目して― |
| 7 | 工業高校における教員間の連携を促進する取り組み　―チーム援助を活用して― |
| 8 | 授業研究の充実に向けた行政研修プログラムの開発　―推進役を果たす中核教員の育成をとおして― |
| 9 | スタートカリキュラム編成・実施・改善の実践研究　―小学校教員の幼小接続に関する意識化に向けて― |
| 10 | 「主体的・対話的で深い学び」を基盤としたスキル育成型カリキュラムの開発と実践<br>―高等学校の学校設定科目カリキュラムの開発と実践を通して― |
| 11 | 総合学科におけるガイダンス機能の充実に関する研究　―科目選択に個別ガイダンスとガイダンスブックを取り入れて― |
| 12 | 小中学校における ICT 教育担当者の力量形成に向けて<br>―授業におけるタブレット PC の活用事例を生かした研修プログラムの開発― |
| 13 | 組織としての授業改善を推進する方略の研究　―「主体的・対話的で深い学び」の事例集作成と共有を通して― |
| 14 | 子どもの学校適応を促す学校組織と教師の関わりについての研究　―新たな不登校を生まないために― |
| 15 | 協同学習のための学習環境の構築　―思考ツール・ICT を活用した協同学習の実践と学習環境の整備・改善― |
| 16 | 学力面で支援を要する児童が多い学級で効果的な理科授業のデザイン |
| 17 | 授業改善につながる校園内研修ガイドブックの作成　―組織的・継続的な校園内研修の実現をめざして― |
| 18 | 教員の思いを還元しながら進める校内研究の在り方　―非授業者のコミットメントを高める授業研究の実現をめざして― |
| 19 | 中学校英語指導における「文構造への気づき」を促す授業　―「内容への深まり」に着目して― |
| 20 | 体験することにより心を育てる道徳教育の検討 |
| 21 | 高等学校化学における言語活動を通じた記述力と自己効力感の向上に関する実践的研究 |
| 22 | 体育授業における主体性を引き出す授業づくり　―教師から生徒への相互作用行動に着目して― |
| 23 | 中学校数学科における授業のユニバーサルデザイン　―ワーキングメモリ理論に基づく学習指導の工夫― |
| 24 | 協同学習を取り入れるためのプロセスモデルの開発　―小学校での授業実践を対象として― |
| 25 | 小学校英語における「子供の伝え合う力」の育成　―CLIL の授業実践― |
| 26 | 高等学校国語科における教育の情報化に関する実践研究 |
| 27 | 英語のスピーキング力向上メソッドの実践的開発 |
| 28 | 中学校社会科における思考力育成を目指した単元計画フォーマットの開発と評価<br>―マルザーノ・タキソノミーの「認知システム」に着目して― |
| 29 | 新学習指導要領に基づく生物教育 |
| 30 | 高校数学科初任教員向けの授業づくりハンドブックの作成　―生徒が自主的・主体的に学ぶための指導を目標に― |
| 31 | グループワークを基盤としたパフォーマンス評価の実践と「質」の追究　―「知識・技能を活用する力」の評価をめざして― |
| 32 | 生徒の学習意欲を高める中学校社会科の授業づくり　―ARCS モデルの「関連性」に着目して― |
| 33 | 高等学校数学科における協働学習に関する実践研究　―学習者が主体的に学び合える授業をめざして― |
| 34 | ラウンド制指導法を軸とした「英語の学力」と「使える英語」の基礎的な力を育成する指導法 |

平成 28 年度・29 年度修了生の実践課題研究報告書要旨については、大阪教育大学連合教職実践研究科のホームページにも掲載しておりますので、ご覧ください。
https://www.osaka-kyoiku.ac.jp/~kyoshoku/youshisyuu/

# 修了生・在学生の「振り返り」と「今」

## 修了生・在学生の「今」からみる教職大学院の学び

### ■ 鎧水 遼 さん（平成 29 年 3 月修了・大阪市小学校勤務・関西大学経済学部卒）

私が大学院への入学を決めた大きな理由は、教員としての専門性を高めたいと思ったからです。この大学院では、教育現場での実習が多く設定されており、机上の学びだけでなく、理論と実践を往還できることが大きな魅力でした。

この大学院で身に付けることができたのは「授業力」です。実習校での授業実践を通して、どのような授業設計にするか、どのような課題を設定するか、その課題解決のためにどのような指導が必要かを常に検討してきました。現在、日々の授業でもそうした観点を意識しながら取り組むことを心がけています。

現在は、校内の ICT の積極的な活用と推進をめざして、日々授業を行う中で検討したり、校内研修を行ったりしています。「チーム学校」として、どのように学校、子ども、保護者と関わっていくかということを意識しています。

### ■ 家倉 蘭 さん（平成 30 年 3 月修了・大阪府中学校勤務・関西大学文学部卒）

大学 4 年次の教育実習で教員になることを決意したため、教育に関する知識だけでなく教員としてのあり方を考え、学びたいと思い教職大学院に入学しました。教職大学院では現職教員との出会いが刺激的でした。実際に現職教員という立場になってみると、現職の先生方がこの日々の多忙な業務の中、大学院で何かを吸収したい！と学びを楽しんでいた様子を思い出します。本当にすごい先生方と一緒に学べていたのだと思います。まさに「学び続ける教員」に囲まれ、助言や励ましを頂いた 2 年間でした。また、教職大学院には「実践の場」が多くあるのも強みです。フィンランド・イタリア海外実習では、CLIL という理論の枠組みを用いて海外というフィールドで授業実践を行いました。

やはり、教育現場では「やってみないとわからない」ということも多く、実践して改善して、時には理論に戻って考えることの繰り返しです。このように「実践の場」が提供されていることで理論の独りよがりにならず、ストレートマスターであっても「こうすればよいのか！」など何か感覚が掴める瞬間があったり、自分の授業での強みや持ち味を考えたりすることができます。

そして、それらの経験は自信に変わり、自身の教員としての軸となって活かされています。教職大学院には、自分なりに教員としてのあり方を考えられるヒントがたくさんあります。アンテナを張ってヒントを拾い、考える 2 年間は自分次第でとても有意義なものになると思います。わたし自身も大学院での学びを忘れることなく、時にふと帰って一緒に 2 年間学んだ現職の先生たちのように学び続ける教員でありたいです。

### ■ 平尾 留惟 さん（学部卒院生・近畿大学理工学部卒）

私は、学部入学時に、大阪教育大学に教職大学院が新設されることを新聞報道にて知りました。学部 4 回生の夏に大阪府の教員採用試験で合格をいただきましたが、合格通知書を手にした瞬間、自分自身に対する「期待」よりも「不安」の方が大きく感じました。「不安」が大きいまま、現場に立つことはあってはならないと思い、こちらの大学院で、教育について専門的に学んだ後に現場に立ちたいと、「進学」を決心しました。

教職大学院では、「理論」と「実践」の両方の視点から学ぶことができます。講義にて、修得した内容をもとに授業計画を立て、学校実習という形で、現場にて実践。その成果を大学院に持ち帰り、課題を明確にし、その課題をもとに、もう一度、計画を立て、再度それを現場にて実践する。このような環境は他にはないと思います。

目まぐるしく変化を遂げる現代社会において、学校現場に求められていることは「何を学ぶか」よりも「それをどのように学ぶか」の方が重要になっていきます。ここでの学びはそれを児童・生徒に教える前に、教員を目指す我々が学ぶことができます。この 2 年間は必ず、現場で働くときの強みとなる価値ある 2 年間であると確信しています。

## ■ 阿津坂 理沙 さん（平成 30 年 3 月修了・大阪市高等学校勤務）

高校教員となり 15 年が過ぎ、転勤を機会に「学び続ける教員」として、勤務後の時間の使い方を工夫してみよう、学校を、生徒をなんとかしたい、このままの自分ではいけない、という思いで入学しました。

それまでニュースなどで教職大学院の話題が上がり大変興味を持っていました。また、勤務校の外国人の先生から「日本の先生は採用後にも自分を高めるために勉強しないと」「外国ではキャリアアップのために大学院に行く教員も沢山いるよ」という話に刺激を受けました。

当時は学級担任を持っており、現場を離れたくない、他の教員や勤務校に負担をかけたくない、という気持ちもあり、夜間の教職大学院に入学できることは大変ありがたかったです。

勤務終了後に大学院に通うことは大変な時もありましたが、勤務校の先生方の理解や、生徒、保護者、家族の理解のおかげで通うことができました。勤務で疲れていた時も、大学院の校門をくぐれば学生であり、教授陣の素晴らしい授業を受け、学友と議論をし、一緒に帰路につくことは有意義で楽しかったです。また生徒の立場に立つことで、先生からの声かけや、気にかけていただけることの嬉しさや、学友などの仲間の大切さ、学業や提出物の大変さを学生として感じることができ、次の日生徒への声かけや見方が変わりました。

ゼミにも恵まれ、研究室で先生のご指導を受け、教授や同じゼミ生と「チーム」として学校や生徒のことを真剣に考えることができたこと、また、学校心理学という学問に出会ったこと大きな財産です。学校心理士の資格を取得し、日本学校心理学会に入会し、学会での研修やポスター発表で、全国の方々からご意見をいただいたことで大きく世界が広がったと感じています。

## ■ 山中 佑介 さん（平成 30 年 3 月修了・寝屋川市教育委員会勤務）

私は現職教員として小学校で勤務しながら、２年間教職大学院で学びました。入学してよかったことは本当にたくさんありますが、やはり、一番は、教師としての専門性と実践力を高めることができたことだと思います。連合教職大学院では、教育現場が直面する諸課題に対応した科目が設定され、幅広く、また深い学びを得ることができます。授業は、研究者教員と実務家教員のティームティーチングによるものが多く、疑問に思ったことなどは、すぐに質問したり、話を聴いたりすることができました。

私の場合は、２年間、学級担任をしながらの通学になりましたので、時間の確保という面では苦労がありました。しかし、その中で、自分が取り組んだ校内研究の充実に向けた実践研究を一つのきっかけとして、所属校の教職員が意欲的に校内研究に取り組んでいる姿を見たときに、大きなやりがいを感じたのを覚えています。通学にあたり、所属校の先生方には大変お世話になりましたので、自分が取り組んだことが、個人の研究という枠に留まるのではなく、学校全体へと広がりを持っていくことは、とても意義深いことでした。

現在、私は市教育委員会の指導主事として、主に教職員研修業務に従事しています。多くの場面で、教職大学院で培った様々な専門的知識が役に立っていると実感します。これらは、学校現場だけでは学べなかったものばかりでした。

そして何より、この教職大学院で多くの先生や仲間と出会えたことが、一番の財産です。院生同士、共に考え、議論をしたり、励まし合ったりしながら深めた絆は、今後もずっと続くものだと感じています。ぜひ、多くの現職の先生方に、連合教職大学院に入学していただき、ここでしか得ることのできない経験をしてほしいと願っています。

## ■ 安田 加弥 さん（現職院生・大阪市小学校勤務）

大阪市の教員になって 12 年。「心理学を学びたい」という漠然とした思いを抱えながらも、学校業務に追われ、忙しい日々を送っていました。そんな時、学校心理学の研修会に参加し、感銘を受けました。そこで講師をされておられたのが、現在の指導教員である家近早苗教授です。家近教授の、経験に裏付けられた専門的な知識や、学校現場で今すぐ使える考え方に触れ、「もっと学びたい」と強く感じ、入学を決意しました。

入学後、仕事と学業の両立に対する不安はありましたが、理解ある同僚や家族の支えがあって乗り切れました。大学院での学びは学校現場ですぐに生かせるものばかりであり、理論と実践の往還する中で、学び続けることの楽しさを実感する日々でした。限られた時間の中で学ぶことで、長年の課題であった計画性や行動力を身につけることもできました。何より、確かな専門性をもって誠意ある指導をしてくださる教授方、優れた実践力をもつ仲間との出会いは、かけがえのない宝物になったと思います。

問い合わせ先　大阪教育大学天王寺地区総務課

TEL　06-6775-6634

MAIL　kyoshoku@bur.osaka-kyoiku.ac.jp

URL　https://osaka-kyoiku.ac.jp/rengokyoshoku/index.html

発行：2018年　夏